《翻　訳》

ダリット連帯プログラム報告

一九九四―一九九五

桐村彰郎（訳）

（解説）

本稿は、ダリット連帯プログラム（DSP）によって公刊された「ダリット連帯プログラム報告　一九九四―一九九五」（DALIT SOLIDARITY PROGRAMME REPORT 1994～1995, the ISPCK DELHI, 1995）を部分的に訳出したものである。

ダリット連帯プログラムは一九九二年一二月マハラシュトラ州ナグプールで結成された。ダリット指導者・アンベドカル博士が一九五六年、数十万のダリット大衆・マハールとともにヒンドゥ教から仏教に改宗した故地である。その会議には日本、ネパール、パキスタン、スリランカの被差別者運動の関係者が招待された。この運動は、ジュネーブに事務局を置くキリスト教の超教派機構WCC（世界教会協議会）のボブ・スコット師が、バグワン・ダス氏、ジェームズ・マッセイ氏にアプローチしたことが直接的契機となって開始されたとはダス氏の証言である。

ダリット連帯プログラム全国活動委員会のメンバーは下記リストのとおりであるが、注目すべきは、二二名のクリスチャン、一三名のヒンドゥ、一二名のブディスト、二名のムスレム、二名のシクという超宗教的な構成となっており、かつ濃淡はあれ、北東部を除いてほぼインド全土を網羅するかたちになっていることである。そのなかには、ダリット出身で各宗教の著名な指導者たちがいる。またダリット自身も九〇〇以上のジャーティに分かれている。DSPは、全インドの異なった宗教、異なったジャーティを超えてすべてのダリットをひとつの旗のもとに結集し、さらにすべての被抑圧者に連帯をひろげ、また全世界の被抑圧者との連

帯を希求しているのである。その結成目的は、ダリットの統一、教育の解放、ST（指定部族）との共闘、ダリット問題の国際化であった（本文参照）。

DSPは組織ではなく、プログラムだとはダス氏の強調するところである。DSPは専従職員ももたず、また上意下達のヒエラルヒー的組織形態でもない。本文にもあるように、ダリットの自覚化と連帯を促進するため、セミナー、集会、キャンプなどさまざまなプログラムを全国各地で活発に展開している自発的運動体である。バグワン・ダス代表、ジェームズ・マッセイ幹事の両氏を中心に役員間で緊密な連絡をたもちながら運動が展開されている。DSPは一九九七年一二月、結成目的を再検討し、ダリット政党との連合、多数の諸組織との連携についても考慮した結果、ひきつづき従来の目的、運動方法を堅持することに決定した。

訳者は全国大学同和教育研究協議会のカースト現地研修団の一員として、一九九六年三月インドを訪れた。本『報告』は、その際デリーのダリット・コミュニティを案内していただいたラルフ・ダス氏（バグワン・ダス氏の子息、ダリット活動家、デリー市厚生事業部門医療部長）から一行に提供していただいたものである。ダリット関係者の著作は多くはないが、バグワン・ダス氏、ジェームズ・マッセイ氏のものも含めて、日本には若干知られており、その一端は部落解放・人権研究所（旧・部落解放研究所）図書資料室で見ることができる（インド・カースト研究に関しては、国際身分制研究会編『国際身分制研究会中間報告書』〈一九九八年三月刊〉の関係論文および《関係文献目録（その一）》参照）。

本『報告』は、DSP全国活動委員会メンバー一〇名の報告（下記リストの3、4、5、7、10、11、14、16、33、34の番号の人々）を一本化して編んだものであり、かならずしも統一された体裁ではなく、また誤植もなしとしない。これを訳出しようとするのは、統一され抽象化された論文からは抜け落ちがちな、ダリットの活動家や大衆の「生の声」、「現場からの叫び」をこの『報告』に見ることができるからである。文字どおりの拙訳のため、どこまでこの「声」を再現できたかは心許ないが、微意を汲み取っていただければ幸いである。

なお、本『報告』の抄訳については、バグワン・ダスDSP代表の快諾をいただいたことを記しておく。

記

ダリット連帯プログラム全国活動委員会メンバー

A　役員

1	代表：	Mr.バグワン・ダス	ニュー・デリー　ブディスト
2	幹事・理事：Dr.ジェームズ・マッセイ師		デリー　クリスチャン
3	Dr.（Mrs.）スワルナ・ラタ・デビ		アンドラ・プラデシュ　クリスチャン
4	A.ラメイア教授		タミール・ナドゥ　ヒンドゥ

B　メンバー

5	Mrs.ルス・マノラマ		クリスチャン
	カルナタカ		
6	Mrs.M.カンブル師		クリスチャン
	マハラシュトラ		
7	K.J.ジョン師		クリスチャン
	ケララ		
8	Dr.M.E.プラバカール		クリスチャン
	カルナタカ		
9	カラム・マシ師		クリスチャン
	デリー		
10	アイザック・P.マン師		クリスチャン
	パンジャブ		
11	Mr.ナジール・マシ		クリスチャン
	パンジャブ		
12	Mr.ダニエル・B.ダス		クリスチャン

	パンジャブ		クリスチャン
13	Dr.アシシ・マッセイ		
	ウッタル・プラデシュ		クリスチャン
14	Dr.V.デバサーヤム		
	タミール・ナドゥ		クリスチャン
15	A.P.ニルマル教授		
	タミール・ナドゥ		クリスチャン
16	Dr.J.H.アーナンド		
	マディヤ・プラデシュ		クリスチャン
17	Dr.アイプ・ジョセフ師		
	ケララ		クリスチャン
18	Mr.サダカール・ラムテケ		
	マハラシュトラ		クリスチャン
19	Dr.（Mrs.）ジョッティ・ランジェワール		
	マハラシュトラ		ブディスト
20	Dr.（Mrs.）ビマル・サラト		
	デリー		ブディスト
21	Mrs.S.ワグメア教授		
	マハラシュトラ		ブディスト
22	Mr.プロモド・クマール		
	ウッタル・プラデシュ		ブディスト

23 Mr.P.L.ミムロス　ブディスト
ラジャスタン

24 Mr.モハメッド・カダス　ムスレム
グジャラート

25 Mr.サルダル・シン・ノナ　シク
パンジャブ

26 Dr.（Mrs.）ブルンダ・サカルカル　ブディスト
マハラシュトラ

27 Dr.D.S.ガイクワッド　ブディスト
マハラシュトラ

28 Dr.K.M.カンブル　ブディスト
マハラシュトラ

29 Ms.カイラシュ・カウル　ヒンドゥ
ハリヤナ

30 Mrs.クルパ・ガウタム　ブディスト
デリー

31 Mr.S.バーレカル　ヒンドゥ
マハラシュトラ

32 Mr.イシュワール・ダス　ブディスト
ヒマチャル・プラデシュ

33 N.G.メシュラム教授　ブディスト

	マハラシュトラ		ブディスト
34	Dr.アチンティア・ビスワス		ヒンドゥ
	西ベンガル		
35	Ms.クスム・メグワール		ヒンドゥ
	ラジャスタン		
36	ミンズ主教（部族）		クリスチャン
	ビハール		
37	Mr.カンジラム		ヒンドゥ
	ケララ		
38	Ms.シェリファ		ムスレム
	タミール・ナドゥ		
39	Mr.O.ラムダス		ヒンドゥ
	カルナタカ		
40	Mrs.プリムロウズ・プレム・マシ		クリスチャン
	パンジャブ		
41	Mrs.グルミート・カウル		シク
	パンジャブ		
42	Mr.K.L.チャンダバイ		ヒンドゥ
	ジャム・カシミール		
43	Mr.カリチャラン		ヒンドゥ
	ウッタル・プラデシュ		

目次

44 Mrs.アニー・ボロ　マディヤ・プラデシュ　クリスチャン
45 Mr.P.C.ジーナ　オリッサ　クリスチャン
46 Mr.ベニア　オリッサ　クリスチャン
47 Mr.ダリット・パスワン　ビハール　ヒンドゥ
48 Mr.モティ・ラル・アーナンド　ビハール　ヒンドゥ
49 Mr.ラジウェイド　グジャラート　クリスチャン
50 Mrs.D.L.パセカル　ゴア　ヒンドゥ
51 Mrs.カマラ・グルジャル　グジャラート　ヒンドゥ

ダリット連帯プログラム報告

一九九四―一九九五

序文：バグワン・ダス　ＤＳＰ代表
前置きの報告：ジェイムス・マッセイ　ＤＳＰ名誉幹事・理事
プログラム優先ナンバー・ワン：
さまざまなダリット連帯プログラムの強化とネットワーク化
北西インド（以上本号）
西部インド
中央および北東インド
南部インド（詳細は女性および青年諸報告参照）
プログラム優先ナンバー・ツー：
ダリット共通イデオロギーに関する協議会
プログラム優先ナンバー・スリー：
ダリット・先住民全国協議会報告
プログラム優先ナンバー・フォー：
ダリット問題の国際化
女性プログラム
ダリット女性会議：ラクノウ
指導者訓練キャンプ：チャンガナチェリー
準地域の女性ワークショップ：パンジャブ州シャプール村
女性会議：プネー
マヒラ・ジャグラン：カラジア
エンパワーメント・プログラム

北京女性会議
DSP青年プログラム：年次報告
青年指導者訓練：ピネリ
パラライ村訓練プログラム
全国青年プログラム計画ワークショップ：ナグプール
マンナ・シン・ワラ村セミナー兼村落レベル訓練プログラム
村落レベル自覚化キャンプ：マクー
ダリット青年指導者訓練キャンプ：チャンガナチェリー
ダリット連帯指導者およびエンパワーメント・プログラム：ナグプール
青年指導者訓練プログラム：ウスコタイ
新たなパラダイムの全国青年幹事会議
世界教会協議会総書記とその一行訪問時における演説の交換

序文

一九九四―一九九五年のダリット連帯プログラムは、全国委員会での決定を遂行するなかで作りあげられた。今回は我々は草の根レベルで活動している組織や人々にアプローチすることを望んだ。

セミナーや小集会が、全人口の約三〇％がダリットであるパンジャブ州で開かれた。指導者や活動家は、バタラのバーリング・ユニオン・クリスチャン大学や、アムリッツァ、グルダスプール、フェロゼプールの諸県の他の場所で行なわれたプログラムに参加した。洪水や大雨に冒された村々もまた訪問した。我々はとても知識のある献身的な若い指導者達をいく人かみつけた。

いくつかの集会が西部インドのマハラシュトラ州のデオロリ、ボンベイ、マハード、プネー、ナグプール、オーランガバードで、

グジャラート州のラジコート、ジュナガード、アーメダバードで、ゴア州のバスコ・ダ・ガマでおこなわれた。

青年の指導者訓練キャンプがタミール・ナドゥ州ポンネリ郡ウスコタイで組織された。女性訓練プログラムキャンプがアンドラ・プラデシュ州ピチャトゥアのNYSS教員居住地でおこなわれた。もうひとつの女性指導者訓練キャンプが一九九五年六—七月にチャンガナチェリーでおこなわれた。

青年や女性はより注目に値する。将来、問題にとりくもうという指導者がでてくるのは、彼らの間からだからである。ダリットと先住民は両者に共通の問題を多くかかえている。ビハール州ランチーの協議会は、会合し、共通のプログラムを作り上げるための最初の第一歩だった。

このほかに、全国委員会で採択された決定にもとづいて、指導者や活動家の一行がヨーロッパに派遣された。「ダリット問題」を国際化しようというプログラムの遂行にあたって、友人や共鳴者と会合するためである。

本報告はDSPの活動の要約である。来るべき数か月、過去の経験から学び、またダリットの活動家や知的で社会的な指導者の知恵や経験から得るところがあって、我々は少し異なったアプローチをするであろう。我々は、人々を動かして、友愛と統一と連帯の意識を吹き込み、そしてまた、過去において統一を妨げてきた内部矛盾を除去するために熱心に働かなければならない。我々はまた、ダリットを抑圧し搾取し、その分裂と不統一と他の弱点から利益を得てきた人々が、より強力で強大になってきているが故に、警戒を怠ってはならないのである。我々は、彼らの中の強力で豊かな人々が、貧しく弱い人々が立ち上がり光輝くのを助けるようにアプローチしなければならないのである。

我々は、関心を示して我々に援助を保障したWCC（世界教会協議会）のDr.コンラッド・レイザー、ボブ・スコット師、Dr.コビアや他の役員たちの訪問によって励まされた。これはダリット問題の深い理解から出てきたのである。我々は彼らの友情と我々の仕事に示した彼らの鋭い関心を評価する。我々は友人と共鳴者を必要としている。我々の課題は困難であり、財源は限られているからである。人々は教育されねばならない。人々は組織され、そして潜む危険やダリットの敵の活動についても警告されなければならない。我々は支配階級が何を考え何をやっているのか、また彼らの決定がどのようにダリットに影響を及ぼすのかを見、そして研究すべく目と耳をあけていなければならない。

本報告は単に達成したことを表現しているだけでなく、また我々の目標を達成するために何がなされるべきであるかを示すものでもある。

バクワン・ダス
ＤＳＰ代表

前置きの報告

一九九四年一〇月―一九九五年九月の時期

友よ、

一九九四年一〇月―一九九五年九月の時期にＤＰＳが実行してきた活動の報告を提示することを私はしあわせに思う。

今年我々は報告の体裁を変えたので、私は簡単なスケッチをするだけにし、それに地域の召集者や他の役員の詳細な報告と、いくつかのケースでは準地域の召集者の報告を付け加える。これらの報告は、一九九二年一二月、ナグプールでの第一回全国大会が我々に手交した四点の課題（協議事項）の文脈において考えられるべきである。これは以下のことを含んでいた。さまざまなコミュニティのメンバーの間での自覚化の過程をつうじて、連帯のために働くこと、これまで我々のコミュニティを監禁状態にしてきた国の教育システムを解放すること、先住民（部族）のような我々の姉妹コミュニティとともに働くこと、国際社会の理解を求めてダリット問題を国際化すること、である。

過去一年間、我々の活動が一九九四年九月に終わった段階から、我々は地域的レベルから局地的また準地域的レベルまで、活動開始をすることができた、と述べることを、私はしあわせに思う。これは全国活動委員会のメンバーや国中の他の仲間の努力の故に可能になったのである。

一九九四年一〇月の全国活動委員会の終了直後に、地域委員会が来るべき数か月のために計画し準備をはじめたが、国のある部分では一二月にはスタートし、プログラムのなかったはただの一カ月にすぎなかったのはおおいに満足に思うことである。

プログラムの報告に入る前に、わが国が巨大で、しばしば国のある部分の状態や緊張が、必ずしも国の他の部分の人々に影響を及ぼさない、という点があることを、我々は記憶しなければならない。同じことは我々のコミュニティの生活状態についても真である。国のいくつかの部分では、ダリットは非常に自覚的であり、読み書きができ、教養があり、他の部分では、小学五年の少女でさえも高度の教養があるとみなされる。このような状態は、機会が利用できるかまたは欠けているかのために生ずるのである。この事実にまず着目して、コミュニティの状況に、そして特に彼らの意識水準に関連しているようなやりかたで、プログラムを計画することが必要であった。我々はこの挑戦に十分に応えることができたことを喜ぶべきであると思う。

その結果、強調点はさまざまな地域で異なったものとなった。北西インドでは、我々はなお活動の基盤を創出する過程にあるので、参加者が一緒になったり討論したりするのに十分な時間を割り当てられ、自覚的意識への第一歩を進めようとするような、村落レベルのプログラムに強調点が置かれた。同時に、我々の仲間は、西部および南部インドでは、現行の戦略および将来においてとられる積極的方向を吟味できるようなプログラムを計画し、遂行することができた。中央インドでは、西ベンガル州がその高水準の意識でもって、自覚化プログラムにおいて、ノン・ダリットをターゲット・グループのひとつにすることで先頭に立つことができた。同時にビハール州は、歴史的なダリットと部族・先住民の対話でリードすることができたが、その結果は「インドのダリットおよび先住・部族民合同行動評議会」の結成となった（JACDIP）。同じようにグジャラート州は、六〇人の公務員の教師の一団をもって現行の教育システムの再方向づけをはじめた。

北西インド

北西インドでは、我々は組織化の基本的必要性を提起した。そしてこれは村落レベルの集会を通じて可能となった。八つのこのような集会は、DSPによって支援された。四つの県レベルの集会もまた、パンジャブ州のフェロゼプール、アムリッツァ、グルダスプールの諸県で、DSPによって支援された。これらとともに一つの女性会議と二つの青年会議も組織された。

これらの他に、六つの集会がDSPのために組織されたが、パンジャブ州のパティアラやサングルール、ハリヤナ州のヒサールといった諸県では、コミュニティそれ自体によって十分に支援された、ということを指摘することも必要である。これらの村落レ

ベルの集会には、それぞれ三〇—四〇人の参加者があったが、これらの村落コミュニティが、集会を持ち、もっぱら問題を議論し、よりよい明日のために今日行動するという集団決定をおこなったのは、はじめてのことであった。

西部インド

西部インド地帯は、四地帯のうち、諸州と連邦直轄地の各々でプログラムをおこなった唯一の地帯である、という特徴を持っている。西部インドでは、六つの準地域プログラムが、グジャラート州のラジコート、ジュナガード、マハラシュトラ州のデオラリ、オーランガバード、プネー、ゴア州のバスコ・ダ・ガマでおこなわれた。これに加えて一つの女性プログラムもプネーでおこなわれた。我々が、市立学校の教師のための協議会を通じて、教育の再方向づけで実質的に前進できたのは、この地帯、特にグジャラート州のアーメダバードにおいてであった。我々はドロップアウトや授業の欠陥の問題、とりわけ全体としてインドの状態とは無関係な押しつけられた形式教育のシステムの問題を提起した。このシステムの目的は、標準化された労働機械を大量生産することであり、現状を維持することである。助長者としての教師の役割もまた強調された。多くの追跡調査がここではなされる必要があり、我々は、この必要性を処理するために、具体的方策がただちにとられることを、のぞむものである。

中央ならびに北東インド

この地帯は、インドのダリットの状態の典型としてあげることができる。この地帯のあるところは、高度に自覚的であるが、その他のところは等しく敏感ではなく、自己評価に欠け、非人間的な状態である。

西ベンガル州では二つのプログラムを持つことができた。第一は一九九五年三月に、第二は一九九五年七月に、である。

マディヤ・プラデシュ州では、女性プログラムがカラジヤで組織された。我々はまたライプール県で一日セミナーを持ったが、そこで、我々はＣＮＩ（北インド教会）のジャバルプール主教管区の最初に認められたダリット主教スニル・カク師に祝いを述べた。

ウッタル・プラデシュ州では、我々は、アラハバードで「ダリットと部族の憲法上の諸権利」について唯一のプログラムを組織

できた（それは実際には本集会の後に催されることになろう）。

南部インド

南部地帯では、最初のプログラムは一九九五年一月にアンドラ・プラデシュ州のピネリでおこなわれた「ダリット青年の指導者訓練キャンプ」であった。次のプログラムはタミール・ナドゥ州のラマナタプラム県にあるパラライ村でおこなわれた自覚化兼指導者訓練キャンプであった。これにつづいて、ダリット女性指導者訓練キャンプが六月にケララ州のチャンガナチェリーでおこなわれた。青年指導者訓練キャンプもケララ州のチャンガナチェリーでおこなわれ、約三〇名の青年男女が参加した。この地帯の最後のプログラムは、タミール・ナドゥ州のチェンガイ－ＭＧＲ県でおこなわれた青年訓練プログラムであった。この地帯が、青年に対し、高度に動機づけられかつ確信に満ちた生活へのアプローチを与えること、こうして彼らを有利な立場から闘争できるようにすることに真剣であるのは、注目されうることである。

女性プログラム

我々が女性プログラムについて真剣に考えることは明らかに必要である。私は、今年はＤＳＰの女性プログラムが北京女性会議のために影響を受けたと思う。我々の全国レベルでの指導者達は北京会議の調整にかかわっていたし、私はこのとてつもない課題が時間のほとんどを取ってしまったと信じている。我々が熱心にフォローした新聞記事からみて、全体として北京会議は我々の姉妹たちの戦いにおける画期的な出来事であったように思われるし、そして、このために、この会議にかかわったＤＳＰの姉妹たちの地味な貢献を我々が高く評価していることを、私ははっきりさせておきたいと思う。彼女らが北京で得た識見は、もう一度我々の姉妹たちを地元レベルで組織し、彼女らの間での連帯のために、そして、彼女らの究極的な解放のために働くときに、明らかに実を結ぶだろうと私は確信する。

それにもかかわらず、女性たちは、グルダスプール（パンジャブ州）では村落レベルで、チャンガナチェリー（ケララ州）やプネー（マハラシュトラ州）では州レベルで、もっぱら彼女らのために組織されたプログラムにおいて会合する機会を獲得した。我々

はこの地域での活動の進展を期待している。

青年

村落や州レベルでの青年プログラムが、ピネリ（アンドラ・プラデシュ州）、シャプール（パンジャブ州）、チャンガナチェリー（ケララ州）やチェンガイ（タミール・ナドゥ州）でおこなわれ、また全国協議会がナグプール（マハラシュトラ州）で開かれたが、私はこれは我々の努力を集中する必要があるもうひとつの分野である、と再び強調したい。もしわが青年層が今日我々の情勢にかかわらないならば、彼らはブラーマンの洗脳と否定的条件によって敗北し抹殺されるであろう。わが発展途上のインテリゲンチャは抑圧構造へと組み込まれ、もう一度我々のアイデンティティは破壊され、今度は我々がそれを発見する以前にさえもどることになろう。

ダリット問題の国際化

この点に関してはたいへん実り多い年であった。我々ＤＳＰの一行はオランダ、ドイツ、スイスを五月二五日から六月九日にかけて訪問した。この間我々は、パートナー団体、教会代表、他のＮＧＯ代表、人権活動家、ジャーナリストを訪れた。我々が目指した課題が成功のうちに達成されたと、訪問を評価しうるのは確かである。すべての者が、ダリットとの連帯を誓い、そして多くの者が我々を支援することを請け合った。ヨーロッパのパートナーはまた、ダリット自身が指導し教導するあのダリットのためのプログラムにかれらがコミットメントすることを強調した。

この他に、我々は北京女性会議へ行こうとする三人の人物を後援しようとした。しかし、調整の欠如のために、うまくこの会議に全員を送ることができなかった。我々はまた、一九九五年三月一四日から二二日までアンドラ・プラデシュ州ハイデラバードで開かれた、ＷＣＣ（世界教会協議会）―ＣＣＡ（アジア・キリスト教協議会）―ＮＣＣＩ（インド教会協議会）のアジア青年活動会議に参加する四人の青年を後援することができた。

これらは要するに、国際的、全国的、局地地域的なプログラムのいくつかであり（その詳細なリスト［訳者により略］は次頁以

下にみられる)、我々はこれらを過去一年間遂行することができたのである。しかし今年に延期された重要な活動がいくつかあるということを、私はここで付け加えなければならない。これらは以下のものを含む。

一、ジャカラン・ジョセフ氏や他の人々が召集して、タミール・ナドゥ州で開かれるダリット議会

二、デリーのDSP幹事・理事および他の人々の調整になる全国連絡協議会

三、デリーの幹事・理事の調整になる「ダリット共通イデオロギー」の形成に関する全国協議会

四、幹事・理事の調整になるナグプールで開催の先住民およびダリット全国協議会

これら四つの主な行事に関しては、組織的な細目のいくつかはすでに成し遂げられており、うまくいけば、これらは次の六—八カ月の間に開かれるであろう。

Dr.ジェイムズ・マッセイ
名誉幹事・理事
ダリット連帯プログラム

一九九四年〜一九九五年行事カレンダー

(略)

プログラム優先ナンバー・ワン
さまざまなダリット連帯プログラムの強化とネットワーク化

一九九二年のナグプール全国会議は、当面のところ、DSPのプログラム優先ナンバー・ワンは、地域レベルでさまざまなダリット連帯プログラムを強化しネットワークを作ることである、との指令を発した。さまざまな地域から受けた返信は、この指令を

実行するためには、我々の努力が地域の必要性と自覚化のレベルを反映しなければならないことを、絶えず想起することが必要だということを示していた。

さまざまな地域の人々を先ず同じような動機づけのレベルにすることが必要である—どんな基準でも途方も無い課題であるが—。しかし、我々はスタートした。見習うようなモデルは存在しなかった。先ず我々は過ちから学び、力をとぎすまさなければならなかった。思いかえせば、地域ごとにプログラムは非常に異なっており、プログラムそのものもさまざまだったのである。しかし、我々のコミュニティの基本的ニーズを提起できたこと、そしていくつかの地域におけるダリット・コミュニティにそれぞれの特殊情勢を問題にしはじめることができるようにしたということに、我々は満足感をもっている。以下の三つの地域報告は現場での我々の経験を反映するものである。

北西インド

北西インド地域は、デリー、ハリヤナ州、パンジャブ州、ヒマチャル・プラデシュ州、ラジャスタン州、ジャム・カシミール州とチャンデガール政府直轄地から成る。ダリットとともに活動するグループが少数ある。これらのグループは小さく局地的で全く組織されていない。その上これらのグループは概して孤立して活動している。この地域における主要な課題は、これらのグループに、その力をプールするよう動機づけることであり、そのためには、お互いのいうことに耳を傾け、自分たちの問題が共通であることを自分で見つけだすことができるように、いくつかの村の人々が一緒になることが必要であった。これは、連帯を構築する最初の第一歩であろう。

我々は、この努力で得た経験から、何世紀もの従属や条件づけられた恐怖のため、時々人々が、自分自身の解放のために危険をおかして手をつながなくなってしまうことに気づいた。しかし、あえて危険をおかす幾人かの人々が常にいるのであり、DSPの活動のための基礎の構築に今従事しているのはこれらの人々なのである。

以下の協議会が、北西インド地域で開かれた。

県レベル活動家協議会

九四年一二月二九日。グルダスプール県シャプール村
健康と教育のためのキリスト教協会本部事務所。
九五年　一月　一日。アムリッツァ県ジャンディアラ・グルー。
九五年　五月　六日。フェロゼプール県マンナ・シン・ワラ。
九五年　五月　七日。グルダスプール県グルダスプール。
村落レベル活動家協議会
九四年一二月　四日。アムリッツァ県カーパー・ケリ村。
九五年　一月　八日。グルダスプール県シャプール村。
九五年　二月　一日。アムリッツァ県ラル・グーマン村。
九五年　二月二七日。グルダスプール県、アムリッツァ県、フェロゼプール県の召集者のシャプール村会議。
九五年　三月一二日。アムリッツァ県タルワンディ村。
九五年　三月　五日。アムリッツァ県ノナ村。
九五年　五月　一日。グルダスプール村活動家会議。
九五年　五月　七日。フェロゼプール県マクー村。
女性会議
九五年　七月二三日。シャプール村。アムリッツァ、フェロゼプール、グルダスプールから三〇名の女性が参加。
青年会議
九五年　七月三〇日。シャプール村。四一名の青年（クリスチャン一七、シク一一、バールミキ九、ヒンドゥ・ダリット四）が参加。

プログラムの内容は、多かれ少なかれ、とりあげられたすべてのプログラムで同じようなものであった。参加者たちは、過去に

おいていわゆる「上層カースト」の用いた方法論について、また近い将来直面することになる挑戦や試練について、ダリットに関する新財政政策の結果や上層カーストによる社会的区分化の政治について、意識するようになった。参加者たちは、それから小グループに分かれて、進行中の話と自身のコミュニティの生活状況との関連を討論した。討論では常に平行線が見られた。さまざまなコミュニティからきた人々は、また、彼らが一般に直面している問題が、ダリットのすべての部分に共通であることを発見できた。この段階で新しい自覚が生じ、ともに活動し戦う決意を生み出すことができた。

各プログラムにおいて、特別な関心事や女性および青年問題を討論するための時間もまた割り当てられた。

女性会議

女性会議は、ハザラ・マール師による祈りから始まった。祈りのメッセージのなかで彼は言った。「人類において抑圧は不服従に始まった。我々は、抑圧と罪から抜け出すために、お互いに従わなければならない。我々ダリットは統一、ひとつの思想、ひとつの道を持たねばならない」。祈りのあとで女性たちは四つのグループに分かれた。

「我々は誰か?」に答えて、すべてのグループは、いかなる人間的承認もない人間であり、それゆえにダリットであることに全員一致で同意した。答えは次の含意を表していた。我々は貧しいレンガ積みであり、家庭奉公人であり、カンミ（土地をもたないもの）であり、家庭掃除人である。そして、女性は人間としてではなく、子供を産む機械、どんな不平も言わないで働く機械とみなされている、と。

グループは、彼女らの子供たちが適切な教育を受けていないことに同意した。子供たちは、差別される公立学校にいく以外に選択はない。教育や異なった労働方法は現状に変化をもたらすことができる。我々はすべての種類の抑圧に反対して団結しなければならない。

青年会議

青年には、その両親がダリットの出自、すなわち清掃人、家庭奉公人、レンガ積みである青年たちを含んでいた。青年たちのあ

るものは言った。「我々は我々の職業や家柄に与えられた侮蔑的な含意すべてにうんざりしている」。彼らは完全な変化を望んでいた。青年たちは、これまでとられてきたどんな種類の努力にも満足していなかった。討論全体はひとつの事実—不満—を指し示した。彼らは強調した。「学校では、教師も仲間の学生も我々を見下している。それゆえに退学以外に方法がないのだ」。

これらのほかに、六つの会合がDSPのために組織されたが、パティアラ、サングルールおよびヒサールの諸県ではコミュニティ自身によって十分に支援された。これら村落レベルの会合には、それぞれ三〇—四〇名が参加したが、これらの村落コミュニティが集まって、もっぱら問題を討論し、そして、よりよい明日のために今日行動すべく集団的な決定をしたのは初めてのことであった。

さまざまなプログラムについての参加者たちの所見や提言のいくつかを以下に示す。

我々ダリットは、マヌがおこなった以上に、カースト・サブカーストや職業にもとづいて分断されてきた。我々はまた、その職業のゆえに、我々自身の間で、あるカーストを別のカーストより劣っているとみなしている。我々特殊技能をもった人々は、我々の技能を高いとか低いとか呼んできた。これは討論の間にでてきた問題であった。尋ねられた質問は、「我々はこれに責任があるのか。あるいは、これは我々に押しつけられてきたのか」。討論は続いた。「我々の職業の安定のために、我々は仲間の兄弟に対するこの種の態度を受け入れてきた。上層カーストは、もしローハールが他のものと自由に交わるならば、彼から水をもらわないであろう。ローハールはもしチャマールの家で食事をするならば仕事を得ることはないであろう。同様にチャマールが掃除人と食事をすれば、死んだ動物の皮を得ることはないであろう。システムは続いていく。そして我々は、理解することなく、これが我々を長いあいだ軛のもとにつなぐであろうと認識することなく、無意識に分断されているのである」。

さまざまな問題を強調しつつ、参加者たちはさらに言った。「我々ダリットはたいてい字を知らず無自覚な人間である。我々は迷信と誤解の犠牲者である。我々は自分の手の力を認識してこなかった。我々は金も土地もまだ持っていないけれども、働く手を持

っているのだ」。

「歴史を通じてずっと、我々は仏教、キリスト教、イスラム教、シク教を受け入れてきた。しかしこれらの宗教はすべてダリットをよそよそしく遠ざけた。ダリットは依然としてそれらの力の犠牲者なのだ」。

参加者の意見

(a) Dr.エドマンド・ウェーバー「ダリット問題はインドだけでなく世界の問題であり、それはすべての国に共通のものである。ダリットはその宗教を変える必要はないが、自分たち自身の発展のために団結しなければならない」。

(b) Dr.ジェームズ・マッセイ「我々ダリットはインドにおける先住民、原住民であり、土地の所有者である。我々がどんな宗教、サマージを受けいれていようと、マヌ主義やブラーマン主義の信奉者は我々の発展をとどめ、我々の問題は更に複雑にされた。我々は自らの相続したものを自覚する必要がある」。

(c) サム・ナト少佐「カーストの他に、金持ちと貧乏人という大きな区分がダリットの間に出てきている。教養があり比較的豊かなダリットは、まだ発展していないダリットにたいして関心と義務を持たねばならない」。

(d) Mr.ナジール・マシ「我々ダリットが変化する社会のなかで自らのニーズを感じかつ認識するときがやってきた」。

(e) Mrs.チャナン・デイ「ダリットとは、不正の犠牲者である人を意味する。だから我々は不正に対して自らを強めなければならない」。

(f) Dr.ジェームズ・マッセイ「ダリットとは運動を意味する」。

(g) Mr.ブタ・ラム「ネイティヴ（ダリット）は外国人に対して戦っている。彼らは数千年前にインドを侵略し、わが母国の抑圧者となったのだ」。

(h) Mr.ナンド・ラル「ダリットは最大限に抑圧されている」。

勧告

① ダリットはたいてい字を知らず無自覚である。ちょっとした病気でも、薬を飲むかわりに医学的治療を受けに行く。
② ダリットは金や土地を持たないが、働く手を持っている。
③ DSPとはダリットの意識を覚醒させることである。
④ 我々ダリットは団結せねばならぬことを理解しなければならない。
⑤ 憲法や哲学や教育という武器は、弾丸より強い。
⑥ ダリットとは、不正の犠牲者である人々を意味する。それ故我々は不正に対して自らを強めなければならない。
⑦ 原住民（ダリット）は外国人に対して戦っている。彼らは数千年前にインドを侵略しわが母国における抑圧者となった。
⑧ ダリットは世界のいたるところで抑圧されている。しかしインドで最も抑圧されてきたのだ。
⑨ 我々の闘争はカースト制度を押しつぶすことなのだから、何を読むべきか（とくに宗教的なもの）をみきわめなければならない。
⑩ 我々は、すべての悪弊に対して、ただちに戦わなければならない。我々は、わが民が、密造酒の消費や薬やギャンブルや早婚のような悪習から距離をおくように目覚めさせなければならない。
⑪ 幼児の死亡を阻止し、家族計画をもつこと。強力な子供保護や、健康管理のプログラムが、選ばれた村々で、即座にはじめられるべきである。
⑫ 各村落は可能なかぎり多くの女性を含んだ村落委員会を持たねばならない。
⑬ 村落の会合召集者は、六週間たつごとに会合し、そのプログラムと問題点を共有しなければならない。
⑭ 村落の会合召集者の次期の会合は、九五年二月二七日に開かれるべきである。
⑮ 村落委員会のメンバーのために、一日あるいは二日のセミナーが一九九五年五月に準備されるべきである。

［以下次号］